ミレーネ様の言うとおり

村上真子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミレーネ様の言うとおり

【Ｎコード】

Ｎ６３２４Ｒ

【作者名】

村上真子

【あらすじ】

仕事帰りに突然フラッシュのような光を浴びて目を開けると、見たこともない薄暗い部屋で、暗いなかでもよくわかる美女がいて、更科宮子を見てにっこり笑った。ミレーネと名乗った美女は「今日からあなたがミレーネよ」と謎の言葉を残す。突然勝手に異世界トリップさせられた宮子を待っていたのは、返品不可能な王妃様の地位！？しかも口の悪い王様には「初恋を教えてくれ」とか言われちゃって！？平凡なＯＬと女嫌いな王様が心通わすラブストーリー（予定！）

00　プロローグ

どうしてこんなことになっているんだろう。
確か今日はいつもどおり残業をして、コンビニに寄って適当にお弁当とビールを買って、へとへとで帰宅したはず。

なのに、どうしていまわたしの目の前には、ブロンドの髪の超が１０個くらいつくような美女が煌びやかドレスに身を纏い、わたしを見て目をキラキラと輝かせているのだろう。

「嬉しい。やっと成功したのね」

美女は声までも美しかった。
鈴を転がしたような、というのは目の前の彼女のためにあるような言葉に思えた。

「あの、ここは一体…」

薄暗い部屋を見渡すとずらりと本棚が並んでいるのが見えた。
ここは、書庫か何か？

「うふふ。ここはリコリス。そしてわたくしはミレーネですわ。あなたのお名前は？」
「え、えっと、宮子です。更科宮子（さらしなみやこ）」
「サラシナミヤコ。そう、ミヤコというのね」

ミレーネと名乗った美女はくすりと笑い、宮子の手を握ると意味深長な言葉を舌にのせた。

「そして今日からあなたがミレーネよ」

＊

がばりと宮子は飛び起きた。
妙な夢を見たせいで心臓がまだドキドキしている。
仕事帰りに突然フラッシュのような光を浴びて目を開けると、見たこともない薄暗い部屋で、暗いなかでもよくわかる美女がいて、宮子の手を握り謎の言葉を残した。

そんな、夢。

疲れてるのかな、有給も全然とってないし、土曜日も出勤だし…。

ふう、と溜息を吐き、握りしめている布団が自分のものでないことに気付いた。
え、と思い辺りを見渡せば、やはり自分の部屋ではなかった。

ひとりで眠るには大きすぎるベッドも、シンプルだが見るからに高そうに見える家具も、宮子の部屋にはない。

まさか拉致されたとか、いやいやそんなバカな、だってそうだとしたら待遇がよすぎるじゃない。
うちは資産家とは縁をゆかりもない一般家庭だし、身代金を要求したって高が知れてる。
この身なりを見て金持ちと判断するなんてありえないと思う。

会社で大きなプロジェクトに関わっているわけでもない。

心当たりのなさに唸っていると、奥の扉が厳かな音を立てて開いた。

「おはようございます、ミレーネ様。お加減はいかがでしょうか」

「は？」

入って来たのはメイド服を着た高校生くらいの女の子だ。

お世辞ではなくとても美少女な彼女は、畏まった態度でぺこりと宮子に頭を下げる。

どうしよう、まだ夢から覚めてないみたい。

「あの、誰かと勘違いされてるんじゃありません？わたしの名前は宮子です。み、しか合ってないです」

「ええ。存じております」

彼女は深い溜息を吐き、深くお辞儀をした。

「本当に申し訳ございません」

「えっいやあの、名前を間違えることくらい誰にでもありますよ」

年下の、しかも初対面の女の子にこんな反応をされては対応に困ってしまう。

宮子にも後輩はいるが、恐縮や謝罪が出来ない子たちばかりだ。

やっぱりわたしが上司向きじゃないってことかしらと少し落ち込みながら、頭を上げるように頼むと、彼女はきれいな所作ですっと背筋を伸ばした。

「ミヤコ様。いいえ、ミレーネ様」

「ん？」

「誠に申し訳ございませんが、あなた様が今日からミレーネ様なのです」

状況が呑み込めないまま、夢と同じだわとぼんやり思う。
やはりこれはまだ夢の中なのだ。
だって、意味がわからない。

「ミレーネ様の言うことは絶対ですから」

01　ミレーネ様

王様ゲームならぬミレーネ様ゲーム？

メイド服の少女を首を傾げて見ていると、悲しそうな顔をされた。

美少女はそんな顔さえ絵になる。

「このような言い方しか出来なくて申し訳ございません。わたしも何から伝えればいいのか迷っているのです」

「えっと、それじゃあ名前から教えてくれないでしょうか。わたしは更科宮子です」

「いいえ、あなたはミレーネ様です。そしてわたしの名前はエリーゼ。どうぞエリーとお呼びください」

「何度も言うようだけど宮子ですからね？」

どうして名前のところだけ言葉が通じなくなるのだろう。

訂正するとエリーはまた悲しそうな顔をする。

「…わかりました、ミヤコ様。わたしとあなた様が二人きりのときはそう呼ぶよう致します。ですが第三者の前でのあなた様にはミレーネ様でいていただかなくてはなりません」

さっぱり意味がわからないがここで蒸し返しては話が続かない。

「…さっきから繰り返し出てくるミレーネ様って一体だれのことなの？」

とりあえずひとつずつ問題を片づけていこうと、一番気になっていることを聞いてみると、エリーの周りの空気が緊張したようにピリッと張り詰めた。

「ミレーネ様はカヤラン国の第三王女様でございます。美しさと強さを兼ね備えた完璧な女性です。金色の絹糸のような髪はカヤラン国の宝と謳われるほどでした。わたしはそんなミレーネ様に十四の頃からお仕えさせていただいておりました」

「夢でミレーネって名前の超絶美少女と会ったことがあるわ。まるで彼女のことみたいね」

「ミヤコ様。それは夢ではございません。それは薄暗い薄気味の悪い書庫での出来事ではございませんか？実はわたしはあのときミレーネ様のお側に仕えていたのです」

「え…。夢じゃないってどういう…」

「ミレーネ様は完璧でした。ある一点を除いては」

エリーは沈痛な面持ちでミレーネ様のことを語り始めた。

＊

ミレーネ様は好奇心旺盛な方で、とても頭のいい方でした。
目に映る全てのものに興味を持たれ、カヤラン国の書庫の蔵書も全

て読破されておりました。
たくさんの書物は彼女に知識と探究心を与えました。
そして余計なもの、魔法への関心をも与えてしまったのです。

「エリー、知っていた？世界はとても広いのよ。世界はカヤランだけではないの。全然別の国もあるんですって！」

そう言ってミレーネ様は顔を火照らせました。
手には水晶玉が輝いています。
魔法への関心を抱いたミレーネ様が魔法を使えるようになるのに時間はかかりませんでした。
普通ならば何十年もかかるという大魔法も、知己に富んだミレーネ様はあっと言う間に取得してしまったのです。

わたしが覗いても水晶玉には何も見えませんでしたが、王女様には別の世界が見えていたようでした。

「エリー、知っていた？わたし、今日、彼女と目が合ったの。これはきっと運命だわ！」

あなた様の、ミヤコ様の世界の様子が。

ミレーネ様と目が合った、ミヤコ様の。

あなた様はきっと何も知らないでしょう。
ミレーネ様が勝手にあなた様の世界を覗き見て、あなた様と目が合ったと感じただけなのですから。
それでもミレーネ様にはそれで十分だったのです。
ここと違う別の世界で初めて目が合った人間。

それは特別な人間に他ならない。
そう、お考えになられました。

その頃ミレーネ様にはリコリス国の王との婚儀の話が来ておりました。
勿体なきお話で城の者も国民も、皆、この幸運を喜びました。
けれどミレーネ様おひとりだけは、この話に見向きもしませんでした。

「嫌ですわ、王妃になるだなんて。そんなに素敵な話なら、エリー、あなたが嫁げばいいじゃないの」

女の幸せは素敵な殿方に嫁いで、その肩の御子を儲けること。
けれどミレーネ様にとっての幸せはそうではなかった。
あの方は知識の海に沈むことが最上の幸福だと考えていたのです。
でもミレーネ様は賢い方でしたから、わたしにそのような不平不満はぶつけても、決してその想いを外に出そうとはしませんでした。
国王陛下や女王陛下の前では頬を薔薇色に染めて喜び、婚礼の日を楽しみにしているように振る舞いました。

しかしお部屋にお戻りになるやいな、分厚い本を開き、何やらぶつぶつと呟きながら一心不乱に本の世界にのめり込んでいました。

このときに気付くべきだった。
呑気にミレーネ様は普通の女と同じように嫁いで、女の幸せを手にするのだと安心していた。

わたしがミレーネ様の一番近くにいたのに、わたしはミレーネ様の心情を理解していなかったのです。
あの方は、最初から結婚など望んでいなかった。

この結婚が大国リコリスの国王から申し込まれた断れない話だからと表面だけ取り繕い、どうにか結婚から逃れる術をさがしていた。

そして、恐れていたことが起きてしまいました。

「エリー、わたしはもうこの国に飽きてしまった。ここにわたしの幸せはないわ。いつも一緒にいてくれたあなたならわかるわよね」

「ミレーネ様…何を…」

「水晶玉に映った彼女のことを覚えている？わたしずっと彼女を見てきたの、あの目が合った日から毎日ずっと。彼女の世界は素晴らしいわ。わたしは彼女になろうと思う。そして彼女がわたしになり変わるの。どう？素敵なことだと思わない？」

「あ、あの、ミレーネ様、それは一体どういう…」

「決行は今夜よ。善は急げよね」

「待ってください。ミレーネ様はこの国をお捨てになるのですか！？リコリス国の王との婚礼はどうするのです！？」

「エリー、わからないのなら無理矢理にでもわかってちょうだい。わたしは彼女と入れ替わる。ただそれだけの話よ」

「彼女って、その方がミレーネ様になりたいと仰ったのですか？」

前のめりになってわたしが問うと、ミレーネ様は愛らしく笑って首

を傾げました。

「言ってないけど、でも何も問題はないわ」

「え…」

「わたしになり変われるなんて余りある光栄でしょう？喜ばない女なんていないわ！ね！エリー！」

そして、ミレーネ様は彼女を、あなた様をこの世界へと誘い、あなた様になりかわりこの世界から去ってしまったのです。

＊

長い物語を聞かされ、思わず突っ込んでしまった。

「その王女様のどこが欠点のない完璧な女性なのよ！問題ありまくりじゃないの！」

エリーは小さくなってぺこりと申し訳なさそうに頭を垂れた。

02　リコリスとカヤラン

でも、とエリーはぼそぼそと言う。

「ミレーネ様のお役に立てるなんて光栄だと思いませんか。あなた様に断らず連れて来たのは悪いことですが、ミレーネ様のためだと思えば喜ばしいことではありませんか」

宮子はひとり頭を抱えた。

どうやらここカヤラン国では、国民は皆ミレーネ様に心酔しきっているらしい。

完璧な女性だとエリーは言っていたが、ミレーネ様は相当我の強いお姫様だったようだ。

「わたしはそうは思いません」

宮子がきっぱり言うと、エリーは心底驚いたというように目を見開いた。

「何故です！？」

「何故って、わたしは今日まで彼女のことを知らなかったんですよ。これが夢だとしてもあまりに勝手です。しかもリコなんたら国の王様と結婚しろとか意味がわからないし。大体わたしはあなたの言うミレーネ様とは似ても似つかない平凡な女ですよ。第三王女ってことは上に二人お姉さんもいて、もしかしたらお兄さんもいて、当然お父さんやお母さんもいるんですよね。ミレーネ様の家族に突然ひょっこり現れたわたしがミレーネでぇすって言ったって、信じてもらえるわけないじゃないですか！」

一気にまくし立てると、エリーはにっこりと笑った。

「それは問題ありません。ミレーネ様の魔法はミレーネ様と同様完璧です。ミヤコ様がミレーネ様ではないと知っているのはわたしだけで、他の方は皆あなたをミレーネ様だと認識しますので何ら心配はありません！」

「で、でも、わたしはミレーネ様の家族とか全然知らないんだけど…」

「それはわたしがきちんとフォローさせていただきます」

「それにリコなんたら国の王様がミレーネ様と同じようにわたしのことを気に入ってくれるとは思えないし…」

「それも問題ありません。ミレーネ様はリコリスの国王を美しくないと嫌っていましたから。あ、ミヤコ様のことはとても愛らしいと大層お気に入りでしたわ。国王も女嫌いで有名な方なので、例えミレーネ様であっても気に入ってくださりはしなかったでしょう。だから、大丈夫です」

それは本当に大丈夫なのかしら。

一国の王様が女嫌いとか問題ありまくりじゃないの。

「エリー…」

「なんでしょう、ミヤコ様」

「わたしはいつ帰れるんでしょうか？」

「ミレーネ様しかわからないことです」

それはつまり、ミレーネ様がわたしの世界を気に入ってしまったら、彼女はもうここには戻らないということではないだろうか。
いや、最初からわたしを呼んだ時点で、戻る気はないのかもしれない。
ぞくりとする考えを追いはらって、これは夢なんだから大丈夫と自分に言い聞かせる。
だってこんな不思議な話、リアルであるわけないじゃない。

頭痛を覚えてシーツの上に寝転がると、エリーが大丈夫ですかと大袈裟に心配してくる。

「大丈夫。ちょっと疲れちゃっただけです」

「そうですか、あの、ミヤコ様」

「はい？」

「わたしに丁寧な言葉は不要です。わたしはあなた様の侍女なのですから」

「え…えっと、はい、じゃなくて、わかったわ、エリー。ここにいる以上はそうする」

「はい。では、ミヤコ様。お疲れのところ申し訳ございませんが、身支度をしていただけませんか」

エリーはわたしの格好を見て言う。
グレーのスーツ姿と、かわいいメイドさん。
確かにちぐはぐかもしれない。
頷くとエリーは嬉しそうにいそいそと奥の部屋に引っ込み、たくさんのドレスも持って戻って来た。

「さあ！お好きなものに腕をお通しくださいませ！」

フリルやリボンの海に目がくらくらする。
普段モノトーンのシンプルな服を好む宮子とは真逆の服、というかドレスばかりだ。

「ミレーネ様はこれが一番好きでしたわ」

エリーがおススメしてきたのは、宮子が一番最初に却下を出した、ピンクのフリルをふんだんにあしらったドレスだ。
目眩を覚えて穏便に断る。
きらびやかなドレスのなかワンピースにも見えるシンプルなものを選択すると、エリーは眉を顰めたが、お好きなものをと言った手前か何も言わなかった。

お手伝いしますという申し出をひとりで着れますからと断ると、また驚いた顔をされた。

「あなた様の世界ではそれが普通なのですか？」

「そうだね。侍女なんていないから」

「ミレーネ様はおひとりで大丈夫でしょうか？」

「完璧なんでしょ？大丈夫でしょ」

少し嫌味も込めて突き放すように言ったのに、エリーは宮子の言葉に笑う。

「そうですわね！ミレーネ様ですもの！」

恐るべし、ミレーネ様。

ドレスはワンピースと思えばそう違和感はなかった。
多少動きづらいが文句は言えない。
言いたい人物はここにはいない。

「お化粧もいたしましょう。リコリス国王が来られる前に」

「ちょっと待って！」

エリーの発言に待ったを掛けると、エリーは首を傾ぐ。

「はい、ミヤコ様。いかがなさいました」

「王様がここに来るの？もうすぐ？」

「はい、お話していなかったでしょうか」

「え、だってここはカヤラン国でしょう。女嫌いの王様がミレーネ様のためにわざわざカヤランまで足を伸ばしたの？」

「申し訳ございません、ミヤコ様。それもお話していませんでした

ね」

「え…」

「ここはカヤランではございません。リコリス国のミレーネ様の、王妃様となられる方に用意されたお部屋です」

「ど、どうして、まだ婚礼前のはず…」

「こちらの世界の決まりなのです。婚礼が決まった女性は、婚礼の日まで夫となる男性の家で過ごすのです」

どうしよう。

ここはカヤランだと思っていたから、こんなのんびりしていたのに。

呑気にミレーネ様について尋ねたりドレスを選んでいる場合ではないのでは。

宮子は焦る。

だって、まだ、わたしはミレーネ様がどんなふうな喋り方をするのか、どんな振る舞いをするのかも知らないのに。

王様を怒らせたら打ち首とかないわよね。

エリーはお化粧いたしましょう、とどこまでもマイペースだ。

「今から化粧したって絶対間に合わないわよ！」

「化粧などどうでもいい」

叫んでしまった声に低い男の声が被る。

おかしい。この部屋にはエリーとわたししかいないはずなのに。

くるりと振り向くと、とても不機嫌そうなオーラをまとった男の人が、眉間に皺を寄せて偉そうに立っていた。

ねえ、ちょっと待ってよ、ミレーネ様。
あなたの美的センス、本当に完璧なの？

目の前にいるその人は、見惚れてしまうくらいきれいだった。

「化粧などしたところで、その地味な顔がそう変わるとは思えん」

口が超悪いけど。

03　ファーストコンタクト

見目麗しい美青年の登場に固まっていると、エリーがさっと宮子の隣に並んだ。

「いくら国王とは言え、王妃の寝室に許可なく立ち入るとは何事でしょう」

お化粧だってまだなのに、というエリーの心の声が聞こえてきそうだ。

美青年は美少女のエリーに初めて気付いたというような視線を寄こすと薄く笑う。

「何だ、お前が王女といったほうが納得する顔をしているな。どうだ、そこの地味顔と身分を取り替えてはどうだ」

エリーはさっと顔を赤らめる。

照れたわけではなく、多分怒りのために。

彼の言い分は尤もな意見だと思うが、カチンと来ないわけでもない。

「そうですわね。素晴らしいご意見に感心致します。見目で身分を選ぶことが出来るのならば納得です。きっと貴方様もお顔で国王陛下をお勤めしていらっしゃるんでしょうね。お顔が宜しいと高い身分につけて羨ましいですわ。カヤラン国では考えられないことです」

来ないわけでもないので、宮子はＯＬ生活で築いた、超むかつくクライアントにも慇懃な笑顔と態度でモードを発動した。

ぴくりと、国王の眉が動くが知ったことではない。

わたしがミレーネ様である以上、やりたいようにやらせてもらう。
この世界でたった一人、自分を更科宮子だと知ってくれている少女が傷ついているのを、宮子は見て見ぬふりをするなんて出来ない。
しかしさすがに言いすぎてしまったのだろうか、隣のエリーがさっきよりも赤くなって、ちらちらこちらを窺っている。
けれど前言撤回は出来ない。
毅然とした態度を保って、挑むように国王を見ていると、国王の顔が歪んだ。

「言うではないか。ミレーネ嬢」

「ええ。口がついておりますから」

「ふん」

国王は何故か宮子のほうに手を伸ばしてくると、くいっと顎を持ち上げてくる。
驚いたが驚きを表さないよう、ポーカーフェイスを保った。

「何故女はわざわざ化粧をする。男に媚びを売るためか」

「は？」

思わず、ばかじゃないの、と声に出してしまった。
失言にエリーがミレーネ様と焦った声で咎めてくる。

「馬鹿だと。いま俺を馬鹿だと言ったか。では何故お前は化粧もしていないと先程喚いていた。俺に媚びを売るためではないのか」

「すみません、馬鹿は取り消します。国王陛下が妙なことを仰るのでつい心の声がもれてしまいました」

「ほう。いくら次期王妃とは言え口が過ぎるな。全く撤回していないではないか」

「質問にお答えします。わたしが化粧をするのは礼儀のためです。例えばわたしは今日初めてあなた様にお会いしました。それなのに寝起きの顔そのままでは礼に欠けると思います。地味な顔を少しでも見栄えよくしたいという女心を理解していただきたいですわ」

「礼だと」

「はい。確かに男性によく見られたいからと化粧をする女性もいるかもしれません。けれどわたしはそういうタイプではないのです。国王陛下の言うとおり、化粧したところであまり変わりませんしね」

少し自嘲を込めて最後はおどけて言えば、エリーにがっと手を握られた。

しかも両手で。

「ミレーネ様！ミレーネ様は謙遜しすぎですわ！ミレーネ様はとても愛らしく人としてもとても素晴らしいお方です！」

「あ…ありがとう…」

「そんな…恐れ多いですわ！侍女に礼など必要ございません！顎で

使っていただいても構わないのですから！」

「え…でも…ありがとうと思ってるのに言わないなんて気持ち悪いよ。エリーが嫌なら言わないけど」

「嫌だなんて…！」

エリーはなぜか目を潤ませる。

王女様って難しい。

自分より身分の低いひとに礼は言わないのかしら。

わたしが王妃に向かないことくらい、王様に言われなくたって自分が一番よく知っている。

「変な女だ…」

ぽつりと呟かれた声に視線を向ければ、国王が理解できないというような難しい顔で宮子を見ていた。

「今まで俺に群がる女は俺に媚びを売ろうと必死だったというのに、ミレーネ嬢、お前のその態度は何なのだ。王妃になることは決まっているから俺などどうでもいいのか」

「どうでもよくありません。わたしの夫になる方なんですよ。それに国王陛下、媚びを売ろうにも売らせてくれる暇がなくては売れません」

「売らずともよい」

国王は疲れたように溜息を吐く。

「ミレーネ嬢、お前、いや、あなたは私が会ったどんな女性とも違う」

言葉が丁寧になったことに素直に驚く。
美青年だという印象を捨てて彼の顔を見れば、そこには心細そうな男の子の顔があった。
国王、という身分だけど、とても若い、多分宮子よりもずっと。

「あなたも知っているだろが、私は女性が嫌いだ」

「はあ」

「恋愛などしたことがない」

「え…」

「あなたが私との婚礼を望んでいないことも知っている。だが、あなたは次期王妃だ」

「そのようですね…」

「先程寝室に入ったことを侍女に注意されたが、本来なら私はそれを許される身分だ。ここはカヤランではなくリコリスなのだから」

「国王陛下、何が仰りたいんですか？」

「あなたが私に礼を尽くすというのならば、私もそれに応えよう。ノックも、善処する。だから、」

国王が突然腰を折り、床に膝をつけ、片足を立てる。

さながらおとぎ話の王子様のような格好で、彼は宮子の片手を恭しく取った。

「私に初恋を教えてくれないか」

手の甲にキスをされ、顔から火が出るかと思った。

０４　恋を知らない国王陛下

イケメンは観賞用としては好きだけど、まさか干渉する存在になるなんて。
お姫様扱いする王様を信じられない思いで見ていると、謎の視線を投げかけられた。
それが返事を求めるものだと気付き、はっとする。
この美青年は何を言い出したの、頭がおかしくなったの。
人のことを地味顔とか言っておきながら、あっ、もしかして実は地味選とか。

「ミレーネ嬢」

「あの、国王陛下。わたしでは役不足かと」

「先程から気になっていたのだが、何故他人行儀な呼び方をする。あなたは王妃になられるのだから国王陛下ではなく名前で呼べ」

「名前…？」

「まさか知らぬとは言わせぬぞ」

知りません。
とは言えず、さっきまでわたしと王様のドラマチックなシーンに目を輝かせていたエリーを見れば、エリーはぺこぺこと頭を下げた。
すみません、お話するのを忘れていました、ということらしい。
聞かなかったわたしもわたしだが、知りませんと素直に言って許してもらえるものかしら。

忘れたよりは誠実でいいかしら。
黙っていると、国王は苛立ったように立ち上がり、じろりと宮子を見下ろした。
「ヴィルヘルム＝ヴィラ＝リコリスだ。ヴィルでいい。ミレーネ嬢、返事は、」
「…断ると言ったらどうします」
「無理だと答える」
「では聞くまでもないでしょう、国王陛下」
「だが私はあなたの了解がほしい。無理強いは嫌いだ」
横暴だが変なところで律儀な人だ。
どうしようかとエリーに目配せすれば、エリーはこくりとひとつ頷いた。
これは、受けた方がいいということだろうか。
ヴィルを見れば、彼は真っすぐな目で宮子の返事を待っていた。
変な人。
「わかりました、ヴィル。わたしの乏しい恋愛経験でよければ役立てましょう」
「おい、お前…じゃなくてミレーネ嬢」
「あの、無理して丁寧にお話にならなくてもいいですよ？」

「…ふん。お前がそう言うならそうしよう。お前、恋愛をしたことがあるのか」

「したことがなくてどうやって教えればいいのでしょうか」

「…いつだ」

「は？」

「いつ恋愛をした。ミレーネ嬢は蝶よ花よと大事に育てられた王女だと聞いている。違うのか」

これはどう答えれば。
エリーを見れば、にこりと微笑まれた。
えーと、好きに話していいのかな。

「両親から大事に育てられたのは本当です。でも恋のひとつも知らない女ではありません。生娘をお望みなら返品されたほうが宜しいかと存じます」

更科宮子、２６歳。
平凡なＯＬとはいえ、彼氏のひとりやふたりいたことくらいある。
いや、同時にふたりいた夢の三角関係を築いたことはないけれど。
相手が二股かけていた酸っぱい思い出ならなくもないけれど。

カヤランに帰ってもいいという言葉を少し期待していたのに、ヴィルはしかめっ面で憮然と言う。

「…家には帰さない」

「そうですか」

「お前のような地味な女に恋愛が出来て、俺に出来ないわけがない」

「はい？なんだか論点ずれてませんか？」

「ミレーネ、お前で十分だ。お前は妙で面白い。俺はお前と恋をすることに決めた。お前も俺を愛していい」

「へ？え？お、教えるってわたしと恋愛するんですか！？」

「何を言う。俺たちは夫婦になるんだぞ。お前は俺に不貞を働けと言うのか。恋に必要ならば働くが面倒だな」

「いえいえいえ！結構です！そんな重すぎる初恋は嫌です！」

「そうか。ではやはりお前とするしかあるまい。ミレーネ、異存は」

「あっても却下なさるでしょう、国王陛下」

「ヴィルだ」

「ヴィル。あなたを好きになれるかわかりませんが頑張ってみます」

しぶしぶ了承したところ、ヴィルは微妙な顔をしていたが、わたしの失礼な言葉には何も言わなかった。

「頑張るのは俺のほうだ。自慢ではないが俺は今まで誰も愛したことがない」

「え。両親も、兄弟も、親戚も？」

「そう無邪気に聞けるお前は、噂どおり大事に育てられたのだな。ミレーネ」

「…あなたは…大事にされていないと？」

「されている。国王としてのヴィルヘルム＝ヴィラ＝リコリスは。だが国王でなくなれば誰も俺を大事にしようとはしないだろう。リコリスはカヤランとは違う」

どうしよう。
不貞よりもよほどヘビーだ。
滅多なことは言えない。
宮子に国王の気持ちはわからない。

だから、

「ヴィル。わたしは今日からあなたを国王陛下ではなく、ただのヴィルと呼ぶことにするわ。恋をするほど好きになれるかわからない。でも、ヴィルを大事にしようと思う」

「本当にお前はおかしな女だな」

ヴィルはくすと笑い、宮子を見た。

「今夜、また来る。忘れていなければノックをしよう。化粧はしなくてもいい。それと、お前も無理に丁寧に喋らずともよい。化粧をしていないと喚いていたほうが本当のミレーネだろう。長居をしたな。それでは」

言いたいことだけ言い、ヴィルはすたすたと去っていった。
ずいぶんとあっさりだ。
それにしても本当のミレーネ様、か。
なんだかどっと疲れてベッドに腰を下ろせば、大袈裟な溜息が聞こえた。

しまった、途中からエリーのことを忘れて好き勝手言いたい放題だった。
ヴィルから咎められはしなかったけど、後半の台詞はやりすぎかもしれない。

「エリー、あの、ん？」

エリーはうっとりとした表情で、赤く染まった頬を両手で覆っていた。
とてもかわいいけど、一体どうしたのかしら。

「ミレーネ様、いいえ、ミヤコ様は素敵な方ですのね。ミレーネ様があなた様を愛らしいと仰っていた意味がよくわかりましたわ」

「え？」

「まるで物語のような展開ですわ。ミレーネ様とリコリス王ではこのようなことにはならなかったでしょう！」

「えーと、エリーちゃん？」

「愛を知らぬ大国の王に愛されて育った王妃が恋を教える。素敵ですわ。乙女の夢ですわ。許されることなら一言一句おふたりの会話

を記し、カヤランで読物として発行したいくらいですわ」

「ごめん、やめて」

「あら、残念です。とても素敵なのに」

エリーはふふふと妖しく笑い、興奮冷めやらぬ様子でまた溜息を吐いた。

どこの世界でも女の子はコイバナが大好物らしい。

「ミヤコ様。恋愛の読物では、このとき男女は本当は心の奥底では惹かれあっているものですが、本当にそうなのですか？」

「現実はそんなに甘いものじゃないわよ。ヴィルのことは嫌いじゃないけど、好きっていうより同情してる気がするから…」

「同情も、情に変わりありませんわ」

にっこり笑うエリーに微笑み返して、宮子はぽつりと思う。

わたしはいま、愛情よりも同情がほしいかもしれない、と。

可哀想だね、なんて言われたくはないけれど。

05　リコリス王の噂

怒涛の展開で頭から飛んでいたけれど、宮子はいまこの世界にひとりなのだ。
エリーという味方はいるものの、彼女は諸悪の根源であるミレーネ様の侍女。
本当の意味で宮子の気持ちを理解してくれない。
きっと可哀想とも思っていないだろう。
もしかしたら宮子は、この先二度と家族や友達に会えないかもしれないのに。
会社はどうなるんだろう。
ずっと行かなかったら自動的にクビ扱いだろうか。
今まで考えなかったことがふしぎなくらい、そんなことを滔々と考えた。

「エリー」

「はい、ミヤコ様」

「ミレーネ様がわたしになりかわったってことは、つまり彼女が更科宮子になったってこと？」

「ええ、そうですわね」

「この世界と同じようにわたしの世界でも、ミレーネ様をみんなが更科宮子だって認識するの？」

「はい、そうなります」

「そっか」

「どうされました？」

「ううん、なんでもないわ」

更科宮子という存在が消えてしまうことはないと知り、ほんの少しだけほっとした。
自分が生きていた場所で、自分が生まれてこなかったことになるなんてぞっとしないから。

「ミレーネ様はきちんと更科宮子をやれているかしら」

「ミヤコ様をずっと見ていたミレーネ様ですもの。大丈夫ですわ」

「…そう。…ん？」

「ミヤコ様？」

「そういえばわたしはどうしてここの言葉がわかるの。これも魔法ってやつ？」

「ああ、そうですわね。それもミレーネ様の魔法です。ですからミヤコ様はこちらの書物も読めると思います。ただしこの世界の情報だけはわたしに聞いていただかなければいけませんが」

「情報か。そうだね、教えてもらわないと。国王陛下の名前もわからない王妃なんておかしいから」

「申し訳ございません。まさかリコリス王がこんなに早くいらっしゃるとは思ってもみなかったもので」

エリーは申し訳なさそうな顔をして、話し始めた。

「リコリス国はカヤラン国三つ分の大きさを誇る、この世界で最も人口が多く、最も栄えている大国です。リコリス国王陛下、ヴィルヘルム＝ヴィラ＝リコリス様は、前国王陛下であったお父上が逝去された二年前に即位されました。お母上は存命ですが前国王陛下がお亡くなりになってからはすっかり塞ぎ込むようになってしまい、ずっと離れに籠っておいでです。前王妃様はヴィルヘルム＝ヴィラ＝リコリス様のことをひどく嫌っておりますから、リコリス国王が即位したことが許せなかったのでしょう」

「どうしてそんなに」

「リコリス国王は、前国王陛下が男の御子をなかなか身籠らない前王妃様に困り果て、妾との間に作ってしまった御子だからです。例え妾の子とはいえ王の血筋の者。リコリス国王が御長子となられました。そしてその一年後、皮肉にも前王妃様が男の御子をお産みになったのです。当然前王妃様はご自分がお産みになった次子の、ルーウェン＝フォン＝リコリス様がリコリス王になることを望みましたが、それは叶わぬことでした。王家では長子を差し置き次子が跡を継ぐことなど無理な話ですから。前王妃様はリコリス王が前国王陛下を亡き者にしたのだと、リコリス王に凶器を向けたこともあったそうです。これは、ただの噂ですが」

自慢ではないが俺は今まで誰も愛したことがない。

哀しむでもなく淡々と言っていたヴィルを思い出した。

「…家族仲が悪いのね。弟さんとも良くはないの？」

「はい。これも噂の範疇ですが、ルーウェン様もリコリス王を憎んでいるという話です」

「…そう。ヴィルは二人兄弟なの？」

「いいえ。末子にシア＝ファウ＝リコリス様がいらっしゃいます。リコリス王とルーウェン様の妹君です。シア様は兄君たちのことを嫌ってはいないようなのですが、リコリス王はシア様のことも愛してはいないようです」

「そんなに事細やかに噂がカヤランにも伝わっているの…」

宮子が呟くとエリーは焦ったようにいいえと首を振る。

「ミレーネ様の旦那様になられる方だからと、ミレーネ様のお父上がお調べになったのです。ご家族仲が悪いことなどは周知の事実ですが、リコリス王が妾の子であるという話は城の上層部の者と、カヤラン国でもカヤラン国王陛下でありミレーネ様のお父上であられる、ブレドルフ＝カヤラン様と、カヤラン国第一王子でありミレーネ様の兄上であられる、レオナルド＝カヤラン様、そしてカヤラン国第三王女ミレーネ＝カヤラン様、ミレーネ様の侍女のわたししか預かり知らぬところです」

それを聞き安心する。そして、疑問を覚える。

ミレーネ様は、リコリス王を支えようという気持ちはなかったのだろうか。

ミレーネ様の幸せは結婚ではないとエリーは言っていたけれど、そ

れにしたって。
エリーを見れば、エリーはなぜか優しい顔で宮子のことを見つめていた。

「エリー？」

「ミヤコ様は何故ご自分がミレーネ様に選ばれたかわからないでしょう。けれどわたしはやはり少しわかるような気がします。本来ならばあなた様と全く関係のないリコリス王のために、ミヤコ様はそういう顔をされる。きっとそれが一番の理由だったのでしょう」

どういう意味なのだろう。
なんだかその視線がむず痒くて話題を変える。
あまり褒められなれてないんだから仕方ない。

「…エリー、ミレーネ様の家族のことも聞いてもいい？一度に全部覚えきれるかはわからないけど、ヴィルも言っていた愛されて育ったミレーネ様のことを知りたいわ」

「はい。喜んで」

それからその日はエリーと色々な話をした。

ミレーネ様のお父さんはお母さんのヒルダに頭が上がらないとか。
第一王子のレオナルドはもちろん、第二王子のアルフは妹であるミレーネを溺愛していて、いまだに結婚していないとか。
第一王女のクリスティアと第二王女のナタリエはすでにそれぞれ領主の家に嫁いでおり、クリスティアには二人の子供がいるとか。
みんなミレーネを心から愛していて、リコリス王との結婚にはこぞ

って反対していたとか。

ヴィルの噂とは真逆のミレーネ様。

こんなにも愛されていたのに、どうしてこの世界を出ていってしまったのだろう。

考えても彼女の気持ちなんてわかるわけがないのに、疑問が口をついて出そうになる。

家族に、エリーに、二度と会えなくても彼女は後悔しない？

完璧だから？

聞けば聞くほどミレーネ様のことがよくわからなくなる。

宮子がうーんと唸っていると、エリーが、いけないわ！と大袈裟に声を上げた。

「もうこんな時間ですわ。ミヤコ様、お化粧しないと！あら、嫌ですわ、わたしったらミヤコ様にお食事を運ぶのも忘れて、すっかり話に夢中になってしまって！」

言われて初めてお腹が空いているような気がしてくるから不思議だ。

おろおろするエリーに、この世界の時間軸がよくわからないので、もうすぐ食事の時間ならヴィルと一緒でいいと告げると、エリーはぴたりと静止した。

「い、いけませんわ。リコリス王はとても食事のマナーにおうるさい方なんです。リコリスとカヤランは国の大きさだけでなく、食事の仕方も違うことをすっかり失念しておりました」

「え、でも、夫婦になるのに別に食事をするなんて」

「別に普通のことだろう」

少し前に聞いた声にぎょっとして振り返ると、ヴィルがふんぞり返るように立っていた。

そして宮子の視線に気付き、ああ、と薄く笑う。

「すまん。ノックを忘れていたな」

０５　リコリス王の噂（後書き）

お気にいり登録ありがとうございます。
楽しんでいただけるようがんばります。

06　食事の時間です　前編

ヴィルは悪びれもせず部屋に踏み入ると、どっかりとソファーに腰掛けた。
寝室から応接間に移っていて良かったと思うべきか。
いくら自分の部屋だと言う実感がないにしても、知り合ったばかりの男の人が寝室にいるのは落ち着かない。
例えそういう関係になると決まっている人だとしても。
美形でラッキーとでも思うべきかしら。

「ミレーネ。食事も摂らず何をしていた。相変わらず化粧をしていないようだな」

嫌味に笑われて、この世界は時間の経過が違うのだろうかとぼんやり思う。
確かヴィルは夜に来ると言っていたのに、えらくお早いご訪問ではないだろうか。
宮子の疑問は、エリーの言葉ですぐに解消された。

「お言葉ですが国王陛下。まだお昼でございます。夜にいらっしゃると仰られておりましたわよね」

ヴィルはエリーをうるさそうに見ると、追いはらうようなしぐさをする。

「俺はいまミレーネと話をしている。侍女が答える義務はない」

エリーは顔を真っ赤にさせてぷいと顔を背ける。
そのしぐさがまたかわいいのだが、いまそんなことを言ったら怒ら

れてしまいそうなので口を噤んだ。

「ヴィル。わたしもあなたが夜に来るものばかりだと思っていました」

「ミレーネ。言ったはずだ。丁寧な言葉はいらないと」

「ごめんなさい」

「何度も同じことを言わせるな。では、お前の質問に答えよう。俺もここへは職務が終わってから来るつもりだったのだが、宰相にミレーネ嬢の部屋を訪ねるということを話したところ、突然今日の仕事はもう終わりだと言われてしまってな。いますぐにでもミレーネを訪ねることが一番の仕事だと追いはらわれてしまってな。宰相たちの思いどおりになるのは癪だが、とくに何もすることが思いつかなかったので来てみた。それだけだ」

「お仕事ご苦労様です。そう、じゃあやっぱりヴィルもご飯食べてないのね。エリー、わたしはこれからヴィルと食事にします」

「ミレーネ様！」

悲鳴のようなエリーに首を傾げてみせると、ヴィルが呆れたような溜息を吐いた。

「お前は人の話を聞いていないことが多いな。侍女がせっかく俺がマナーにうるさいと忠告したのに、何故まだよく知らないリコリスの食事をそんな俺を食べようという気になるんだ。本当に意味がわからないな」

「でも、そんなこと言っていたらいつまでも慣れないでしょう？」

「何がだ」

「ヴィルとこれからずっと一緒にご飯を食べるなら、マナーがわからないとか言ってられないでしょう？最初はわからなくても教えてくれたらちゃんと覚えるから」

何かまた変なことを口走ったのだろうか。
ヴィルが狐につままれたみたいな顔でこちらを見ている。
エリーは頬を上気させ、お食事を用意するよう言ってまいりますわと部屋を退出してしまった。

「…お前は、ミレーネは俺とこれからもずっと一緒に食事をするつもりなのか」

「え。だって、夫婦になるんだから普通…」

「まただ。またお前は話を聞いていないな。リコリスでは例え夫婦であろうが別に食事をする。俺はそう言ったはずだ」

「それは聞いたけど、でも、そうしたらわたしは誰にマナーを教えてもらえばいいの。ヴィルに聞くつもりでいたのに」

「何だと。俺に聞くつもりだったのか。侍女ではなく」

「カヤラン国のエリーよりリコリス国のヴィルに聞いたほうがいいと思ったんだけど、…ヴィルが言うように夫婦で別にご飯食べるのが普通なら従うよ。でも…もし最初からひとりで食べるつもりだったなら、ヴィルはなんでこの部屋に来たの。することが思いつかな

かったって言ってたけど、ここに来るのは別にご飯食べた後でも良かったじゃない」

言いながら、エリーに言ってヴィルの分は片づけてもらわなきゃいけないなと残念に思う。
恋を知りたいと言いながら彼がこんな調子なら絶対に無理だ。
少しは歩み寄ってもらわなければ宮子としてもどうしたらいいかわからない。
ヴィルは宮子の物言いが気に障ったのか、眉間に皺を深く刻んだまま無言だ。

沈黙を守っているとやがて食器と食器がぶつかる音がして、エリーが数人を従えて戻って来た。
ヴィルと宮子の食事が到着したらしい。
ヴィルはわたしとは食べないからと言おうとした瞬間、ヴィルがそれを遮った。

「そこのテーブルに運んでくれ」

「え」

驚いてヴィルをまじまじ見れば、機嫌悪そうに顔をそらされた。
けど、耳が赤い。王様が照れて、いる？
怒っているわけではなさそうだ。

「ヴィル」

「ミレーネ、俺はお前と食事を共にしたくなった。俺の指導は厳しいぞ。後悔はするなよ」

すたすたと先に席についてしまった国王の後を追いかけて、宮子も大人しく席におさまった。
なんだろう、ちょっとうれしいかも。

楽しい気分で配膳を見て宮子は思わず、あ、と声を上げた。

07　食事の時間です　後編

ヴィルが不機嫌だ。
楽しく和やかに食卓を囲めるとは思っていなかったけど、そんなにあからさまに不機嫌ですって顔しなくても。
口をもぐもぐさせながらちらりと給仕をしているエリーを見れば、こちらはヴィルとは正反対でご機嫌だった。
どこかうっとりした表情で宮子のことを見ている。
あとで二人きりになったら称賛の言葉が降ってきそうな予感がして苦笑すると、じろりとヴィルに睨まれた。

「何がおかしい。俺のことをまた馬鹿にしているのか」

「馬鹿にしているなんて」

「さすがミレーネ嬢だ。異国のマナーもお手のものだな」

嫌味っぽく言われてなんと答えていいものか迷う。
リコリスの食事のマナー、それは日本のものとほとんど同じだったから、宮子が教えを請うようなことはひとつもなかったのだ。
少しでもわからないふりをすれば良かったのだが、日本と近いことが嬉しくなって箸を完璧な持ち方で取ってしまったのがヴィルの機嫌を損ねることになった原因だ。
だって、と宮子は思う。
海外旅行をしていて、日本語がわかる人に会ったときの安心感ってあるじゃない？
そんなことをヴィルに言ったところでわかってもらえるわけないけど。

「リコリスの者でもジョスティックを完璧に持てるものはそういないと言うのに。これでは俺が教えることは何もないようだな」

「…まさかここで使うのがは…じょすてぃっくだとは思わなかったの」

「ほう。初めて扱ったわけではないような言い方だな」

まさか生まれてこの方、箸にお世話になりっぱなしですとは言えない。

「初めてじゃないわ。えっと、祖父母がじょすてぃっくを好んで使っていたから…」

嘘も方便。

と、思って言ってみたのに、エリーにひどく驚いた顔をされた。

「はい。ミレーネ様のお婆様であられるモリス様はリコリス国出身ですわ」

フォローされた言葉に今度は宮子が驚く。

え、そうなの。

それならさっきの言葉は嘘にならない。

言ってみるものだわ。

ヴィルはまだ不機嫌そうだったが少し溜飲を下げたらしい。

「そうか。ミレーネは祖父母とも仲がいいのだな。俺にとっての食事はひとりでするものか政(まつりごと)のためだ」

「では本日からもうひとつ加えてください」

「何をだ」

「嫌味なミレーネ嬢と共にするものだと」

ぱちりと下手なウインクを決めてみると、ヴィルはむっと眉間の皺を濃くする。

「何故だ。何故またお前と食事をせねばならんのだ。俺がミレーネに教えることなど何もないではないか」

「教えるとか教えないとかじゃなくて、ひとりでご飯を食べるなんて味気ないでしょう」

「味気ないだと、リコリス城のコックは選りすぐりなのだぞ」

「だからそうじゃないくて。ひとりで食べるよりふたり以上でわいわい食べたほうがおいしいじゃないの、って言ってるの。わたしは初めてここで食べる料理がヴィルと一緒でうれしい」

「ミレーネの言いたいことはわからない」

ヴィルはむっとした顔のまま、きれいに箸を使う。

宮子からすれば、日本人ではない彼がこんなに完璧に箸を扱えるのに違和感だ。

とても様になっているけど、どこかちぐはぐな感じがして面白い。

「無理に理解してもらおうとは思ってないから」

「理解も出来ない。だが悪くない。ミレーネといるのは嫌ではない」
嫌がられてるとは思っていなかったけど、そう言ってもらえるとは思っていなかったのでどきりとした。
忘れてたけどヴィルはすごいイケメンなのだ。
見目の麗しい子に真っすぐ見つめられてそんなこと言われたら、多少なりともときめいてしまう。
ミレーネ様の美的センスをやっぱり疑うわ。

「嫌じゃないなら、また一緒に食べてくださいね。ご機嫌になれとは言わないけど、出来れば不機嫌ではないお顔のときに」

「本当に嫌味なミレーネ嬢だ。噂とは全くあてにならないのだと痛感する」

「噂？」

リコリス国でミレーネ様は一体どんな評価を受けていたのだろう。
ヴィルは宮子の問いには答えず、しかし、と付け加えた。

「俺は別に怒ってはいないぞ。元々こんな顔だ」

「嘘。わたしがじょすてっくを使えるってわかったとき怒ってたじゃない」

「怒ってなどいない。あれは、気に喰わなかっただけだ。俺はこれからミレーネに初恋を教わるというのに、俺には何も教えることがない。マナーを教えることで対等になろうと思ったがお前にその必要はない。だから、気に喰わなかっただけだ」

「なんだ…」

ふんぞり返って怒ってないことを強調してくるヴィルに思わず笑ってしまう。

「何だとは何がだ」

「拗ねていただけだったのね」

「す、拗ねてなどおらん！」

「意外とかわいいとこがあるんですね、国王陛下」

「違う！」

むきになって今度こそ怒っているヴィルに笑いが止まらない。

くだけた空気に気持ちが緩んだ。

ああ、本当はわたしずっと無理していたんだ。

知らないところで本当はすごく恐かった。

意味がわからなかった。

そうじゃないと。

「ミレーネ。俺は怒っていないぞ。だから、そんなに泣くことはないだろう」

「え…？」

この涙の意味を説明できない。

08　ホームシック

ぽたりと手の甲に滴が落ちる。ヴィルが歪んで見える。
慌ててぐいぐい涙を拭い、宮子は笑ってみせた。

「あ、ははは。だ、騙されたね、ヴィル」

「なに？」

「涙は女の武器、だから、騙されちゃだめだよ。女はこうやって男の人の前で突然泣いて、誘惑したりするんだから。女嫌いで有名なヴィルもわたしなんかが泣いたくらいで動揺するんだね」

「ふざけるな」

ヴィルは不機嫌を露わにしてガタンと席を立つ。
そのまま怒って部屋を退室するのだろうと思っていたら、ヴィルは怒った顔のまま宮子の前に立った。

「きゃ！」

そして乱暴に宮子の腕を掴んで立たされる。

「な、なに？」

「ら、乱暴はおやめくださいませ！」

「侍女は下がれ」

思わず駆け寄ってきたエリーにぴしゃりと言い放ち、ヴィルはドアを指差す。
出ていろということだ。
エリーは唇を噛み一礼をすると、さっと身を翻した。
国王陛下に逆らうことはできない。

エリーが出ていったのを確認し、ヴィルは宮子に向き直る。
真剣なまなざしに、初めて彼を恐いと思った。

「何故泣いた」

「…ヴィルをからかっただけ」

「嘘を吐くな。ミレーネ嬢。俺は恋をしたことがないと言ったが、経験がないわけではない。女がよく泣く生き物だと承知している。だがあのように突然泣くのは解せぬな。俺の妻になるというのならばくだらない嘘は吐くな。お前が俺を誘惑だと。出来るわけがないだろう。何故泣いた、正直に申せ」

「…嫌だと言ったら？」

「許さない。言え。理解できないことは嫌いだ」

「…手を離して。そうしたら話すから」

「話せば離してやろう」

ヴィルはそう言ったけれど、少しだけ掴む力を緩めてくれた。
本当に変に律儀な王様だ。

「わ、笑わないでね」

「聞いてから決める」

「ほ、ホームシックになったの」

「ホームシックとは」

「ひとりでここに突然来て、不安になったの。家族がいなくて寂しくなったから、泣いたの。ヴィルが怒ったからじゃなくて、誘惑とかじゃもちろんなくて、ただ本当に心細くなったから、それだけ！ほら、話したよ！手を離して！」

今度は嘘を吐かずにけれどヴィルの手は離れていかない。
もしかして呆れているんだろうか。
一人暮らしを始めて四年。
もう一人の生活には慣れたと思っていたのに、こんなに寂しくなるなんて思わなかった。
お父さん、お母さん、弟、妹。
最後に会ったのはいつだろう、確か元旦に里帰りしてから会ってないのに。

「理解できないことは嫌いだが、聞いても俺には理解できない感情だな」

「だから離してくれないの？」

「いや、どうだろうな。よくわからない」

「わからないことは嫌いじゃなかったっけ」

「嫌いだ。…ミレーネ、俺といるのは嫌いか」

「え？」

「俺は、ミレーネが俺と一緒にいるのが嫌で泣いたのかと思ったのだ」

「なんで？」

「よく言われてきたからだ。父からは表情が乏しいと、母からは愛想がないと、弟からは顔も見たくないと、妹からは緊張すると。みな、俺といると息が詰まるらしい。お前もそうなのかと思った」

「……」

恐い顔のヴィルはどこへやら、いま宮子の前にいるのは捨てられた子犬みたいな男の子だった。

どうしよう。

やっぱり、かわいいかも。

国王陛下にこんなことしていいんだろうかと思いながら、宮子はヴィルに掴まれていないほうの手で、ヴィルの腕を掴んだ。

驚いたのかヴィルの肩が少し跳ねる。

「ヴィルのこと息が詰まるなんて思ってない。別に嫌で泣いたわけじゃないから。ヴィルのせいで泣いたのは申し訳ない事実だけど」

「なんだと。やはり俺が嫌いと言っているじゃないか」

「笑えることに安心したの。やっと緊張の糸が切れたから泣けた」

「お、お前は、俺といて緊張するどころか、緊張が切れたと…？」

「うん。ありがとう、ヴィル」

ヴィルが目を見開いたまま一歩後ずさる。
手を掴まれて、自分でも掴んでいるので一緒に一歩移動すると、離せ、と怒られた。
言われたとおり離したけどヴィルが掴んだままなので距離は変わらない。

「離れろ」

「ヴィルが離してくれないと無理だけど」

「あ、ああ。そうだな、悪かった。痛くなかったか」

「大丈夫。ちゃんと力緩めてくれたから」

ご飯、続き食べようかと誘ったけどヴィルは緩くかぶりを振った。
この人のどこが無表情なんだろう。

「ミレーネ、お前は家に帰りたいか。それとも俺の隣にいるのか」

行かないでと目が訴えている。

家には帰りたい。けれど宮子に帰るすべはない。
だからいつか帰れるその日までは、

「ヴィルと一緒にいる」

「ああ」

「帰りたいって言っても許さないでしょう」

ヴィルはふっと笑った。

「ああ」

09　聖騎士の持ってきた噂

「ヴィルヘルム様ー報告書ー」

大きな音を立ててデュオは参謀室の扉を開け放った。
夕刻までは時間があり、報告書の締め切りはまだだというのに国王陛下の機嫌はすこぶる悪い。

「遅い」

じろりとデュオを睨むと急かすように手を伸ばしてくる。
デュオはニヤリと笑って報告書を手渡すと、へえ、と感心するように溜息を吐いた。

「噂には聞いていたがあれは本当のことなんだな。実際この目で見るまでは信じられなかったが、ふうん」

「なんだ、何が言いたい」

「あなた様が次期王妃様に夢中という噂ですよ。ヴィルヘルム様」

「気味の悪い言い方をするな」

「悪い悪い」

デュオは気安く謝ると、どっかりと椅子に腰掛けウインクを決めた。
他人に聞かれていたら咎められそうな物言いに態度だが、ヴィルは気にしたふうもなく睨むだけに留める。
わざとらしい敬語を使われるほうが座りが悪いからだ。

デュオ＝フィルニールはリコリス国聖騎士、二十四の若さで副隊長を務めている。
ヴィルとは幼馴染で、兄弟同然で育った仲だ。
気心が知れているため、遠慮がいらないのがいいところでもあり、悪いところでもある。
いまは後者のほうだった。

「噂などくだらない」

「そうかよ。でも次期王妃の部屋に通っているのは事実なんだろ。カヤランの宝と言われる美貌に、冷徹なリコリス王もメロメロって聞いて、からかってやろうと思ってたんだけど違うのかよ」

「違う。それに彼女は別に美女ではなかったぞ。噂などあてになりはしない」

「そうなの？」

「そうだ。侍女のほうが見目はいいな」

「厳しいねえ、ヴィルは。まさかそれ本人に言ってないだろうな」

「……」

「言ったのかよ。信じられねえ…。素直なところがお前のいいところだけどさあ、女性にそれはまずいだろう」

デュオはよく言えばフェミニストで悪く言えば女たらしだ。
七日と同じ相手と続いたためしがない。
いつもならお前に言われたくないと言い返すものの、今回ばかりは

デュオの言うとおりなので何も言えない。
言葉に詰まっていると、ニヤニヤ笑われる。
「で、まさかその罪ほろぼしのために彼女の言うこと聞いてるわけ？俺さあ、てっきり結婚は形式上のものだと思ってたんだけど」
「…変な女なんだ」
「ん？」
「ミレーネ嬢は変な女だ。俺が失礼な発言をしたら笑顔で皮肉で返してくる。俺と一緒に飯を食べるのが楽しいと言う。突然泣いて誘惑してみたとか言い出す。そんなつもりがないのは明白なのに。ミレーネは、俺といても緊張するどころか、緊張がとけるそうだ」
ふっと口角を上げるヴィルを、デュオは珍しいものを見るような目で見つめながら、へえ、と笑った。
「それは面白いお嬢さんだな」
「…ああ」
「もしかして今日俺が来るのが遅いって言ったのも、その彼女に早く会いたくてか、なあるほどねえー」
「だから違うと言っている」
むきになるヴィルを見ることが出来るなんていつぶりだろうか。
デュオは込み上げてくる笑みを堪えようとせず豪快に笑うと、ヴィルがまた睨んできた。

「デュオ」

「俺も会いたいな、その面白いお嬢さんに」

「何だと」

「いいだろ。王妃様になる前に会わせてくれよ。お前が彼女にメロメロだっていうなら諦めるけど違うなら紹介してくれたっていいだろ。大丈夫、さっすがに手は出さないさ。な？」

にっこり笑うデュオにヴィルはまた口を噤んだ。
口では勝てないことは、出会ったときから知っている。
知りすぎてるというのも嫌なものだと、ヴィルは舌打ちをした。

「近いうちに茶会でも設ける」

「そう自分から言ってしまったことに後悔するなんて、そのときのヴィルは思ってもみなかったのです」

「妙なことを言うな！」

聖騎士はからから笑って退室していった。
ヴィルは重い溜息をひとつ吐き、ミレーネに茶会の相談をしなければと考える。
デュオに会わせるのは歯痒いがひとつ土産話も出来たか。
ふっと笑う国王陛下がいつになく穏やかな顔をしていたことは、誰も、まだ本人でさえもまだ気付いてはいなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6324r/

ミレーネ様の言うとおり

2011年4月6日13時04分発行